

リュウゼツランの開花



「半世紀に一度の出会い：」、「数十年に一度の開花です」、「吉備塚前で、世紀の花リュウゼツラン、開花間近」これは今夏、奈良教育大学構内でリュウゼツラン（アオノリュウゼツラン）が花を咲かせたことを伝える新聞記事の見出しです。一九九九年そして二〇〇〇年に続き、今年、本学では三个体目が開花しました。メキシコ原産のこの植物が日本で開花するのは大変珍しい現象で、花の印象的な光景を一目見ようと、開花時には学外からも一日に百人以上の見学者が訪れました。このリュウゼツランは、大学と地域社会とのつながりを示す大変良い機会をもたらしたように思います。

隆々たる花芽が姿を現したのは二〇〇二年五月十二日。巨大アスパラガスのように見える花茎の高さを、附属小学校の子どもたちと日々測定しました。一日に約十cmもの勢いで巨大な花茎をぐんぐん伸ばし続け、わずか二ヶ月で高さ六m六十七cm（七月十七日最高値）に達しました。そして、七月二十二日の夕方、ついに、黄色いおしべがつぼみから顔を出し始めたのです。花は八月十一日までの約三週間、花茎の下から上へと徐々に開花しました。したたり落ちるほどの蜜のそばで、ハナムグリなどの昆虫たちが宴の一時を過ごしていました。

●リュウゼツランのホームページ
<http://kaede.nara-edu.ac.jp/agave/index.html>
 （大学院理科教育専攻二回生 稲場 正広）

表紙題字 名誉教授 池田桂鳳

■ 編集後記 ■

お気づきの方も多いと思いますが、「ならやま」は、本号で少しばかりリニューアルしました。表紙、ページ数やレイアウト、記事構成、そして何よりも今回はじめてこの「編集後記」が加わりました。

最初の「編集後記」でまず申しあげねばならないことは、これまでに執筆いただいた方々へのお礼であります。本文はもとより、表と裏の表紙、インタビュー等、ご協力いただきました方々に心よりお礼申し上げます。

一九九五年の春号から始まり、本号で丸八年、十五冊めとなりましたが、この間の大学の变化には、大きなものがあります。そして、さらに大学は変貌をとげようとしています。大学広報誌としては、その様子をお伝えすることを任せてきました。が、八年間の十五冊にあらためて目を通してみますと、大学としてその姿が変わろうとも、変わらない不易な部分のあることにも気づかされます。教育の本質、研究の本質を見極めさせてくれる八年間でもありました。

これからもどうぞよろしくお願いたします。「ならやま」Web版（<http://www.nara-edu.ac.jp/PUBLIC/NARAYAMA/index.htm>）もご利用ください。

（加藤）